

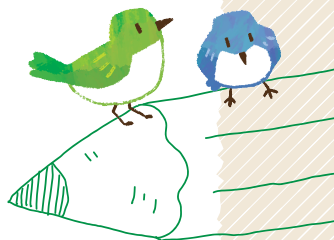


ぼくがすごいと思うのはAくんが嫌だと投げ出さなくなったことだ。そしてかんとくもすごい人だ。Aくんのことを「特別支援学級の子だから」と言い訳を作らずに分け隔てなく、みんなと同じように接している。Aくんだって努力もできるしがんばれる。ぼくと同じだ。だからぼくは「特別な子」ではなく、その人のひとつの「個性」なんだと思って向き合いたいと思った。

ディフェンスもがんばっていた。のこり二分ごろになってAくんはアウトになった。この試合に勝てるか不安になった。そんな中いつも内野にパスを出すAくんがボールを相手めがけて打った。Aくんはひだんアタックはうたない。でもそのボールが相手にあたって戻ってきた。ミラクルがおきた。Aくんは泣いていた。集まってみんなでハイタッチをした。Aくんの活躍で流れがきて、この試合を勝利し、決勝リーグに進むことができた。メンバーだけではなくAくんの両親、応援席にいたみんなが感動して涙を流していた。全国大会ベスト十二位まで勝ち上がることができた。

会長賞

小学生の部



「ミラクル」

本巢市立弾正小学校
4年 竹中 暖治さん

ぼくは一年生からドッジボール少年団に入っている。そこでAくんと出会った。Aくんにはお兄さんがいて、Aくんも練習についてきていたけど、体育館で動画をみたり、走りまわっていた。Aくんは特別支援学級に通っていて、落ち着きがなく、ひとり少し怒りっぽい子だった。

Aくんは三年生のときにドッジボールをやるようになった。ディフェンスは横一列にすきまなく並んでターンをそろえる。Aくんはボールが怖くてターンが遅れたり身体が浮いてしまう。だからアウトになって泣きながら外野にいらっていた。六年生のア

タックは速くて、当たると痛い。だから嫌だったのだと思う。少してAくんはやめてしまった。でもAくんは五年生になってまたドッジボールをやるようになった。はじめは前と同じようにディフェンスで苦しうだったけど、Aくんはだんだんと変わっていった。アウトになっても泣かなくなった。かんとくに大きな声で怒鳴られても話を聞いていた。六年生になってAくんは副キャプテンになった。チームのためにたくさん声を出して、雰囲気づくりをしてくれている。ぼくのいるチームは全国大会を目指すチームだ。ライバルは今年他の大会で何度も優勝しているチーム。そんな中でおかえた県大会でそれぞれやることを精一杯やった。ミラクルもたくさん起こして一位を勝ちとった。すごく大変だったけど、本当に嬉しかった。一か月後が夏の全国大会だ。全国大会の予選は上位二チームが決勝に上がることができる。二試合終って一勝一敗。決勝リーグに上がるためには最後の試合を勝つことが必要だ。Aくんはリーグ戦最終の試合でもみんなに声をかけて背中をたたき、気合を入れてくれた。そして苦手な